

嘉庫 嘉悦大学学術リポジトリ Kaetsu

University Academic Repository

日本民衆歌謡考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2004-12-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井口, 浩一, イグチ, コウイチ, Iguchi, Kouichi メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/120

日本民衆歌謡考

Rekindling of Japanese Poems and Ballads

井 口 浩 一

Kouichi Iguchi

<要 旨>

日本の民衆歌謡（「小歌」）は、日本の『自然』にはじまり、日本の『自然』に終る「ウタ」であります。（終りが始まりだ、ということが「ウタ」の特性であります）。日本の『自然』が、他ならぬ私達一人ひとりであるという自明の事実・アタリマエのことにそう生涯こそ、私達が生きて在る使命であると言ってよいので、そのために、常時、覚醒と自覚・実践を促してやまないものが「ウタ」に他なりません。日本の「ウタ」に素直にそい、「ウタ」を生きるなら、それは、人の永世にまで及ぶと言ってもいいでしょう。日本の『自然』の生々流転が永久であり、同時に瞬間であることによって、そう確信できるものであります。

<キーワード>

ウタ・小歌・大歌・アリノママ・アタリマエ・マコト

はじめに

◎日本の民衆歌謡は、根本的に、きわめて健全であり、崇高なものであります。この健全さや崇高さは、太古から現代に至るまで、寸分の変化もありません。在るとしあるもののイノチの音調そのものを、民衆歌謡は、伝えているからであります。それは、イノチを生きんとする要だからであります。

しかるに、とりわけ明治以降、所謂・知識階級と自他共に許している人々の間にあっては、すこぶるその評判がよくありません。決して大仰ではなく、それらの人々は、民衆歌謡を目の仇にしているといったふうに見受けられる節が、多々あるものです。

民衆歌謡などというものは、旋律・詞、共にまったく独創性がない、思いつきで言葉を並べ、しかも常に義理とか人情といった封建遺制を看板にしている、発展ということがない、総じて、恥ずかしいほど低卑・俗悪である、こういう歌謡をよしとするのは、おそらく頭が悪いからに違いない、等々の、真の根拠を欠いた裁断を下し、自身、平然としているのが、その一群の人々の常態であると言ってよいでしょう。

そして、自らは、どういう状況であろうと己を高しとして、異国の主として器楽（主に、それは、西洋近代が産出した音楽）を愛好し、もって私達・民衆を見下げる言動を忘れません。

かかる無節操な思い上がりは、私には、一種の病気であると思えてならないのであります。それも、相当重い伝染性の病いなのではあるまいかと疑われるのであります。

この病気は、放っておきますと、無際限に自・他を滅ぼし、自然の運行に反目し、とどまるところを知らないはずであります。

この小文は、そういう病気に効果がある薬であります。

◎本小文の引用歌は、断章取義からではなく、古歌より現代の歌に至るまで、広く見渡さんとする視点から採られております。

◎この小文で記述される「ウタ」、及び、「大歌」「小歌」というのは、次のような意味のもとに用いられております。

△「ウタ」——清澄な心が、音となって世に出たもの。この場合、音とは日本語を指します。清澄な心によって、日本語（和語）が語られた瞬間、それはウタになるものであります。純粹な日本語は、旋律や拍をもつためであります。ウタと発音される音義は、もともと、この拍についての共鳴音のことを指したものであります。

△「大歌」——世の事実（イノチ）から離れ、権力を下支えとして、形式を墨守しようとする歌。たとえば、明治以降に興隆をみる歌曲、及び歌曲に類似する歌唱法を採用している歌。（したがって、演歌も、歌唱の方法如何によっては「大歌」化してしまうものであります。この逆も無論あるわけです）。

△「小歌」——題名の民衆歌謡のこと。上記・「大歌」と正反対に位置する歌。即ち、世の事実（イノチ）そのまま、アリノママの歌。権力におもねらず、専ら権威から出発し権威に帰らんとする歌。形式・内容共に、清澄な心に一任される歌、つまり、自由な歌。

▲上記「大歌」・「小歌」の意味は、我が国の歌謡研究に於ける概念とは一致しない。歌謡の研究は、当然のことながら記述可能の領域を超えることはない。「記紀歌謡」の音調が、不明であるのみならず、実は、中世・近世歌謡も、その実際のところはわからないからである。ここでは、そういった伝統的な五官依拠の歌謡を言うのではなく、ただちにウタの本質に超入しようとするものである。

題名を民衆歌謡としたのもこのためで、単に「小歌」とすると、歌謡研究史上の概念が先行し、本・小文の意図するところと混雑することが予想されるため、あらかじめ、それを防止せんとしたものである。

◎本・小文の記述は、一般的に言えば、断案・断面的である場合が多いかと思います。「ウタ」が、美以外ではないところから、それは然らしめられる結果であります。ここから、この小文は、通例で言う論文と考えることがむずかしいと思います。

しばしば指摘される、日本の芸（能）論は、中国や西ヨーロッパのそれより、甚だ貧弱であるというのは、表面上はまったくそのとおりで、我が国の国がらが、論より証拠、つまり、美を言うなら、まず美を实践すべし、とする自然の求めに忠実だからであります。（知識や理屈で「ウタ」が成るとしたなら、それは「ウタ」ではなく、相対的・反神的な、サカシラ談義でしかありません。我が国の民衆の知恵として、かかるサカシラは、代々、家の隅々にまでわたって、極度に忌まれて参りました。それは、一にかかって、知識や理屈が、自然を従とし、人を主としやすいからであって、こういう思い上がりからは、トマト1つ、ナス1つ作れないからなのであります）。

1. 「ウタ」の、おこり

現代、我が国の流行歌謡を「演歌」と称することは、広く行われ、誰もが知っています。さらに、「演歌」の語源は、明治中葉に興隆した政治青年達による、憂国・愛国の演説が巷間を逍遙する間に、その悲憤慷慨調が、いつしか歌となっていったことに由来する——つまり、「演歌」とは、演説の歌ということがその発生である、——このことには、伴奏楽器としてのヴァイオリンが、あずかって力があつた、と言っている、というほどのことは、少し歌謡に注目しさえすれば、誰もが知り得ることであります。

以上のことから、「演歌」が、主として憂国・愛国の至情を唄い、正義が行われぬ世の実情に悲憤し、慷慨することを旨としているらしい、という姿が、一応はわかって参ります。

これは、これで、じゅうぶん意味のあることだと思います。

しかし、注意しなければならないのは、上記のことが、あくまで知識であって、「ウタ」そのものではない、といった点であります。

ここを明瞭に見定めるか、否かということは、単に「ウタ」のこののみならず、私達一人ひとりが、いかに人生に相渉るかという重要な岐路であるように私には思われます。

と言いますのは、この世が、知識や理屈で成り立っているわけではないからであります。

知識や理屈といった、相対的・二元的世界が、この世の事実なのではなく、事実として在るのは、単純な、絶対的・一元的實在によって世はあるので、この事実になんか、私達を含めた、在るとしあるものの生に於ける本然のありように相違ないからであります。それは生の使命と言ってもよいものでしょう。地球全体の環境悪化という現実を直視するのみでも、知識や理屈が、いかに虚栄や計算高さ、傲慢・自己中心等々の反自由の鬼子を産んでしまふものか、もはや一言の要もないはずであります。

「便利なことは、いいことだ」、とか、「地球環境を守ろう」などという、耳ざわりのいい

標語類も、その源は、知識は力であるとする迷蒙から発した、この上ない卑俗な言葉——（「ウタ」の言葉ではない）——だとみなすのが妥当でありましょう。

歌謡に即して、なお、このことを申してみますと、よりはっきりするのではありますまいか。

東海林太郎氏の初期のヒット曲に、「赤城の子守唄」というのがあります。（昭和9年、詞・佐藤惣之助、曲・竹岡信幸）、その4番の唄い出しは、「にっこり笑ってねんねしな」というものであります。

ものごとを、日頃から、相対的・二元的にみ、それこそが唯一の世界把握であると決めつけている向きには、この歌詞が甚だ面妖なものと受取られやすいのではないのでしょうか。あるいは、博徒の行状をテーマにした歌など、歌としては鑑賞にも、歌唱にもたえない、と。

前者は、——子どもに、笑ってから眠れと指示するのはおかしいし、第一、そういうことが器用にできるものだろうか、といったあたりの理屈でしょうし、後者は、この歌の背後に国定忠治をめぐる仁義の葛藤があり、その被害者は、子どもにとどまらない、要するに博徒は、それこそ仁義の道に反するのである、とする裁断でありましょう。

いずくんぞ知らん、そういう現象に固着したことは、この歌のどこを捜そうが発見できないのであります。

では、この歌は、何を表現しているのでありましょうか？

それは、日本人の、生活に根拠をおいた知恵であります。換言いたしますと、美ということのみが、今に唄われているものだ、と言っていいでしょう。

忠治も浅太郎も、勘助も、そしてその子（勘太郎）も、さらには、赤城の山も、歌にあって、皆、イノチの当体として登場しております。このことを保障しているのが、歌の言葉としての日本語であります。したがって、この歌は、昭和9年の歌であって、今日・ただ今の歌であり、且つ、永久に時も所も超えて事実（イノチ）の音調を私達に誕生させ続けるものでもありましょう。（単に、歌と記すより、「小歌」としたほうが妥当でありますので、以下「小歌」・「ウタ」と記載いたします）。くりかえしますが、世は、事実として一元の实在によってしか成立していないものであります。「小歌」は、歌唱するという私達の行為によって、その事実を完全に私達にシラせてくれ、且つ、事実由来する生活化の意欲をも、添えて強力に付与してくれる、という働きをもつものであります。

「小歌」に於ける、この世の事実、そのまみあうという素直さ、健康さは、いくつもの「小歌」の特徴を私達に黙示しておりますが、今は、そのうち重要と思われるものを、3項目だけ掲出することといたしたく思います。

その1. 我が国の歌舞の祖と目される、「天岩屋戸」神話における、「天宇受売命」は、真理として实在し、その歌唱は、イノチとして、今に継がれている、——したがって、「天照大御神」が、歌によって、世に再臨したとする神話は、この現在にあっても、光を招来する方法が「ウタ」であることを示している。この場合の歌とは、「大歌」ではなく、「小歌」で

ある。神は、権威であって、権力ではないからである。

その2.「古事記」の歌謡に、たとえば、次のような詞をもつ「ウタ」が掲載されている。(この種の詞は、「記紀」には頻出している)。

息長帯日売命

この御酒は 我が御酒ならず 酒の司 常世にいます 石立たず 少名御神の 神寿き
寿き狂ほし 豊寿き 寿き廻し 献り来し 御酒ぞ 残さず飲せ ささ¹⁾

かかる、反近代の寿詞は、「小歌」の発暢と、いささかも変りがない。人が、どこにも居ないということが、「小歌」に他ならないためである。だから、昔は今であり、今はそのまま昔である。降臨が、経験の開扉を担保している。

その3.「小歌」は、娯楽と化したとき、零落を開始する。「小歌」の世界にあって、民衆とは、個々人のイノチと同義だからである。ハーンの無私は、このことを上手に見聞している。

演歌の生成が、憂国の士の演説にあったとのみ言い、それで納得するとき、その演歌は、「大歌」たらざるを得ないであります。そういう俗見によるのではなく、憂国の士の至情が、そのまま歌謡化し、且つ、その歌謡の詞(必然的に、旋律を含んでいる。正しくは、音)そのものを生活化させんとするとき、その歌謡は、まぎれることなく、はじめて「小歌」と称してよかろう、と私は思っております。憂国の士の至情は、みごとに人を隠し、イノチは露わにすることにかけて、至って練磨されているとみてまちがいないからであります。おそらく、その練磨は、神代から継がれている方法に拠るものなのであります。「赤城の子守唄」を、我を張らずに唄い、あるいは、聞くとき、知識や理屈を放った人にも、公平・平等に涙が流れるのは、その人が世俗にあって、任侠の人だからではなく、それぞれが、己のイノチに、その刹那に確かに邂逅したからなので、透明なその涙は、日本の自然と、等質・等量であって当然であるように思われます。

2.「ウタ」の唄いかた

事実として、「ウタ」は、誰が・いつ・どこで・どのように唄おうが、音調を通じて、歌唱者のイノチが世に出ていたなら、もうそれだけで満足してかまわないのだろうと思います。何とならば、イノチは、一切を始源へと帰らせずにはいず、その始源が、私達の本来の住居なのでありますから。

ともすれば、私達は、次に挙げるような状況が現実存在する、としがちなものではないでしょうか。

上と下、東と西、丸と四角、昨日と今日。そして、あなたと私、こことあそこ。

かかる、対立・比較・計測・優劣等の、判断・説明・解説・便法、——要するに、知識と

理屈は、こと、「ウタ」に関しては、まったく無用と言ってよいでしょう。(正しくは、私達の人生の全容量に、何の価値ももたないものであります)。

「小歌」は、このことを心得て唄うのではなく、己をイノチにあずけきって唄う、——唄わせていただくと言っていいので、だからこそ永遠への回帰が、何の労作も要せず可能となるのだと存じます。

「小歌」を誹謗してやまない、一群の知識人達が、口をそろえて言うこと、(洋楽は、程度が高い、「小歌」は、あまりに低い、とする一つの基準を設けて裁くこと)

- ◎ 楽(音)譜のとおり唄っていない。
- 小節があって、卑しい。
- どの「ウタ」も、同じような旋律である。
- ノドで唄っている。
- ハヤシコトバと、その旋律には、参る。
- 数値化できない。
- 品のない座興。大ホールでの、品格ある鑑賞には、とても耐えられない。
- どうして、洋楽のような、きちんとした唱法が、いつまでも確立しないのか。

等々は、現象を肯定する、と言うより、現象に敵対するエネルギーが濃厚にあるように見受けられてなりません。それらは、人工的であればあるほど良いというわけのものでありましょう。私のような、日本の一般大衆の感性からいたしますと、たとえば、ベル・cant(美しい歌)唱法という唄い方も、聞き方にもよりましょうが、冷酷・非情と受取られてもいたしかたないところがあるように感じられてならないのです。人工的に、(つまり、説明ができるということ。実際は、この世に説明できることなど、何1つないにもかかわらず、できると信じこむこと)、ある、きまりをつくり、そのとおりにすることが良いことだとするわけのものでありますから、どうしてもそこに無理が生じてしまうはずで。しかし、その作業を、良しとして疑わぬ場合は、ご本人自身はそう思わなくとも、言葉や行為が傲慢になることは、これはやむを得ないでしょう。「楽(音)譜のとおり唄」わないから「ウタ」は「ウタ」なので、「楽(音)譜のとおり唄」いでもしたなら、(異国の方々は、いざ知らず)、私など大衆は、心を打つものがありませんから、ただ笑うだけになってしまうでしょう。

いったい、「楽(音)譜のとおり唄」うことに、どういう意義があるものなのでしょう?

数年前、私は、故・古賀政男氏作曲の「小歌」を披露するというので、同氏ゆかりの会館に聴衆の一人として出向いたことがありました。そして、帰途は、憤怒に近いものがあったことを忘れることができません。

博士と自称する歌唱者は、まず、ご自分の経歴書を配布したうえ、私は、古賀氏の原譜を入手した、それによれば、現在唄われている古賀メロディは、古賀氏の心を蹂躪している、

作曲者の心情は楽（音）譜に表現されるのだから、譜のとおり歌唱すべきである、しかるに、現在は、古賀氏の弟子でさえ、勝手にユリを入れたり、恣意的に音の長短・強弱を操作している、師を裏切ること甚だしい、と述べ、その例をテープで会場にながしたうえ、楽（音）譜のとおり正しく歌唱するとは、こういう唄い方であると、ご自身で唄って聞かせたのであります。——その例歌が、何でありましたか、今は忘れてしまいましたが、ただ一つ、明瞭に記憶しておりますことは、単に、ある波調の音が、長短・高低入り混じって会場を臆面もなく交錯した、という非情さなのであります。よく言われる、棒唄いにそれは近く、古賀氏の心などは、欠片ほども聞かれませんでした。しかし、ご本人は、舞台上大いに満足しておりました。——「影を慕ひて」・「サーカスの唄」・「人生の並木路」・「人生劇場」・「湯の町エレジー」・「無法松の一生・度胸千両入り」そして、「酒は涙か溜息か」・「悲しい酒」、これらの数々の同氏の名曲は、決して楽譜のとおり唄えば、それでよい、などというものではなく、曲に一貫して流れる哀愁と、それ故にある、人為を超えた円光は、古賀氏が私であり、私が古賀氏であるとき、はじめて、その片鱗に触れるかどうかという、生死の関頭に立つものであるはずであります。イノチが、古賀氏を貫流して「悲しい酒」となったので、同じイノチを付与されていながら、心を洗いそこねている大多数の人々には、古賀氏のイノチのマコトを楽（音）譜から表現に代えようと無私の努めを努めるわけでありますから。（念のために記しておきたく思います、明治の添田唾蟬坊・大正の中山晋平・昭和の古賀政男、表向き、古くは、天正の高三隆達など、「小歌」の作者は、本来は、地上的固有名詞をもたないものであります。本当の作曲（詞）者は、イノチであり、そのことあるがために、私達・一人ひとりのイノチが、その働きのある生活・労働を通して作曲者のイノチと交流・共鳴・創生・循環を遂げることができるものだからであります。これは、「小歌」と言うより、我が国の芸道・武道・教育・宗教など総じて日本人の生を、タテに一貫して流れる、生活上の一種の世界把握と実践であり、このことの象徴的代表が、他ならぬ天皇であると言ってよいでしょう。天皇の和語には、唯物性が皆無なのであります。天皇には、姓もなく、肉身もなく、あるのは徳器のみであります。高三隆達が、書の名人、古賀政男が、感動の名人であるのも、ただただ、アタリマエのことでありまして、この、アタリマエということ、換言すれば、イノチ一元ということが、日本文化の根本であるというのは、既に前人の強く訴えているところであります。中山晋平の傑作・「船頭小唄」は、大正11年、世に出ましたが、同時に、平成16年にも新しく世に出続けており、古賀政男の傑作・「湯の町エレジー」は、昭和23年でしたが、今に新しい、——古いイノチということがないために、そうなるのがアタリマエで、このアタリマエのことを、わざわざアタリマエでないようにする、つまり、イノチを無視し、自我を肥大化させて威張るのが、西洋近代の発明品である、現行の記譜法と、その発想による歌唱法である、そのように私には感じられてなりません）。

さて、上記の歌唱者が、博士号を取得したのは、日本の音楽の淵源は、仏教音楽であった、ということを証明してのものであったそうで、その愚劣さには、思わず頭が下がる思いであ

りました。もっとも、かかる虚偽行為に、博士号を授与する大学も同罪でありましょう。と言いますのは、その感受性の甚だしく鈍い歌唱者は、楽（音）譜のとおりには唄いましょう、と揚言して、全国行脚を展開しているとの由にあります。私が、上記の会場へ参りました折も、年若い方々が、何人もおりました。——博士の言われることだから、それは正しいに違いない、と頭から信じたとしても、年若い方々には、寸分の瑕瑾もないのであります。この若者達は、日本に生まれ、日本語を話し、（正しくは、語り）、日本で生活し、日本で生涯を終える方が、十人のうち九人であるのは、明らかなのです。

ところで、太宰治の愛唱歌は、古賀氏作曲になる「男の純情」（詞・佐藤惣之助；昭和11年）でありました。深夜、酔った太宰は、三鷹・吉祥寺辺りの路上で、「男、命の純情は——」と放歌し、高吟すること度々に及びましたが、その心こそが、彼の比類ない名文の古里なので、秀作「人間失格」は、反近代ということの極致、つまり、主人公は神に等しい実在だ、というにあることは明瞭なのであります。彼は、短い一生でしたが、それでも多作で、その中には、世に謂う散文など、ただの一篇たりとも見出せません。彼は、生涯、彼の「ウタ」を、「小歌」として数多く表現し続けて終ったので、現在も、日本人として心ある人々に愛されずにいないのは、そのためなのだと思います。太宰治の文章から、ユリを除いたら、そこに何が残るのでしょうか。古賀・太宰両氏とも、「小歌」を生きたので、「小歌」に生きたわけではありませんでした。

3. 「ウタ」の言葉

「ウタ」の言葉は、基本的に「ウタ」の言葉なので、それを身勝手に他に移さぬことが、「ウタ」を「ウタ」とする行為であることは、何の不思議もないところであると思います。「ウタ」は、申すまでもなく、音調なのでありますから、言葉は、意味である前に、まず音として世に紹介され、その次に、どういう意味をもった言葉なのか、あるいは、文なのかが吟味されても、そこに少しの異和もないはずなのであります。

このことは、本質に着目しているが故に、物示的な定言命法を表示すると謂ってよく、そのことを我が国土着のもの言いと言えば、底の底まで、泥くさく在れ、——アタリマエのことをアタリマエにしろ、と言ったような、自然との共鳴・同一性による、世の事実（イノチ）との交響歌を形成し続ける原点であると言っているでしょう。換言すれば、環境との調和方法が、この音の、人からの優先に伏在しているのだ、といったあたりに、それは落着くはずのものであります。

かかる、音調の、意味からの自立性を素直に尊重する人の在り方は、つまるところ、どういう意義を私達に授与するのか、または、私達に既に授与されているであろう意義を開顕させるものなのか、そのことを、次に掲げておきたいと思います。

（もっとも、この作業は、常に古く、ために常に新しい、我が国の文化の基幹そのままで

ありまして、ひとり、芸能にのみ通行が許されているわけではありません。しかし、今は「ウタ」を主題としておりますので、我が国が「ウタ」の国であって、決して器楽の国ではないことの、1つの証左に価いすれば幸いである、と思うまでなのであります)

音調を徹底して尊重する人の在り方は、人をいかなる人とするかと言え、それは、誠に単純・簡単な主語と述語に約言されると、私は、信じております。即ち、『自然が、人である』、もしくは、『人は、神の子である』、というものであります。

この場合の『自然』・『神』とは、既に私達に自明のこととして、そこに在る存在を實在と観るということなのであります。このことを誤りなからしめるには、たとえば、「旧約聖書」・創世記・第1章の『神』の概念を、自己自身のソトにおかない用意が必要で、逆に、『神』を自己に外在する超越的實在とのみ解釈すれば、(通説が、これである)、「ウタ」の国は、たちまち、意味の国へと、果てしなく墜落してしまうであらう。

(ただし、上記「旧約」・第1章26節、及び28節に言われる「支配」——新共同訳——の語の、ヘブル語による旧約正典は、どのような語、且つ、カナンの地における、当時の民衆が了とした意味はどういうことであつたのか、私には不明である。もし、「支配」の語が、現在の私達が用いる意味と等しいか、あるいは、近似している場合は、通説のとおりとなり、単に我が国の伝統的自然観・世界把握からは、うとましいということにとどまらず、人として生きてある基本をヒキ算とする役にしかたたなくなるものである。「支配」が、調和・共鳴とあればこそ、我が国の立命が振起することは明瞭だからである。闘争は、我が国の国がらから遠く、大和が国がらの根本であるためである。

なお、『神』について、「旧約聖書」を掲げたのは、知識に偏する人々の、おおむねが、

萬・276 妹も吾も一つなれかも三河なる二見の道ゆ別れかねつる

萬・4374 天地の神を祈りて征箭貫き筑紫の島をさして行くわれは

などという歌を、前者は、幼稚な語呂合せ、後者は、「神を」ではなく「神に」とあるべきところ、共に蒙昧である、というふうな愚見を抱き、それを憚りもなく吹聴するため、私ども大衆は、つい、そういうものなのか、『神』は、ソトにいますものなのだ、などときめこむ例が多いことによるものである。他は略す)。

さて、私達の一人ひとりが、『自然』・『神』、ないし、『神』を親とするものだ、との一つの認識は、私達の人生にどのような意義をもつものなのか、——これも、きわめてつづめて言えば、この世には法楽だけがある、そうではないように見えたり、思えたり、感じられたり、聞こえたりする現象は、すべてウツロフ存在なのだ、ということ、属性に拘泥せず、本質を直視し、本質を生とすべし、というほどのことであらう。このための方法が、「ウタ」、即ち、音調を世に表現するという営みである、というわけのものであります。

『自然』・『神』は、完全であること、その完全を世に現わすには、言葉(音調)に拠っているということ、(たとえば、天祖の神勅がそうである)、だから、世の一切は、波調である、といったあたりが、上記の根拠と言ってよいと思います。そして、この根拠の実践が、私達

一人ひとりの、人生についての意義を明徴にしているのだ、とみてよいと思うのです。その意義なるものを、ひらたく申せば、自分も人も、自分も人々も、自分も自然も、「法楽」を創造しつつ天寿を全うできる、というにあると言えます。一意専心・一心同体・以心伝心・色即是空（空即是色）などという古色の熟語も、この意義の上に、その本姿を息づかせるに相違ないのであります。——要するに、このことは、事実由来する科学そのものなのであって、ともすれば、かかる意義の逆を科学であるとみやすい私の跳梁の内省を、それが包含しているのは、この場合、言をまちません。

1. 隠国の 泊瀬の山は 出で立ちの 宜しき山 走り出の 宜しき山の 隠国の 泊瀬の
山は あやにうら麗し あやにうら麗し 「日本書紀」・雄略天皇

2. しなてる 片岡山に 飯に飢て 臥せる その旅人あはれ 親無しに 汝生りけめや
さす竹の 君はや無き 飯に飢て 臥せる その旅人あはれ

「日本書紀」・聖徳太子

このような「ウタ」が、どうして、我が国に、古代より顕著なのかということは、上来記述したところが、その根源であるのは、疑う余地がありません。

1は、美に対した時の、素直な感動であり、2は、自分も他人も、まったくの同一人である、だから、旅人が飢えているのは、自分が飢えているのと同じである、世に悲しいことが起こったら、それは、自分が悪いのである・自分が我を張ったためである・反省すべきなのは自分であるが、どうしても目の前の「臥せる」旅人を見ると「あはれ」を催してくる、というほどの素直な感動であります。この素直な感動というものは、決して、人によって制度上つくられたものではなく、（頭脳知ではないということ）アリノママ・アタリマエの声だという点、決して見逃したくない、と私は思うのであります。このことは、私達に何を覚醒させてくれるのかと言えば、（言葉は、心から発動するものでありますから）、心をアリノママ・アタリマエにしておくことの大切さでありましょう。それは、事実（イノチ）が、粉れないためであり、事実（イノチ）に、そのままそうことが『神』を生きることだからなので、このことを指して「カムナガラ」（神のままに）と我が国では言い言いして参ったことを、私達は、この際思い出しておきたいと思うのであります。

重要なことは、（上記によって）、清澄の極みの心が、「コモリクノ ハツセノヤマハ——」と発音を促したその瞬間は、もし意味を発見するなら、『神』が意を体し、人を介して言わしめているというところにあるのだろう、人が人の意で、始めから「コモリクノ」と言っているのではない、ということに注目する、その貴さである、と私は思います。ここに至って、はじめて「ウタ」は音調であること（『神』の振動ということ。したがって、一切・真、一切・美、一切・善、であること）及び「小歌」こそが、その「ウタ」の本領を具現しているものだ、

こういう点が明瞭になって参ったと思うわけであります。——（「小歌」の作者という存在は、現代に至るまで、詞・曲共に不明である。強いて言えば、民衆全体がその営為に出席したし、している、となるもので、ここに流行ということの秘密が雌伏している。「小歌」の本当の作者は、『神』をにおいて他にはない。芭蕉の言う、「不易流行」の「流行」もこの意であって、だからこそ彼は、風雅の誠をせめる——自然の核心を、我が言葉とする——と言えたので、俗語を正すのが俳諧である²⁾、というのも、みな同一の座標軸から来ているとみなしていい。作者が不明だから、「小歌」には、自由という一大特徴があるので、もし、固有名詞が冠されれば、たちまち不自由な歌、「大歌」に変身、降下してしまう）。

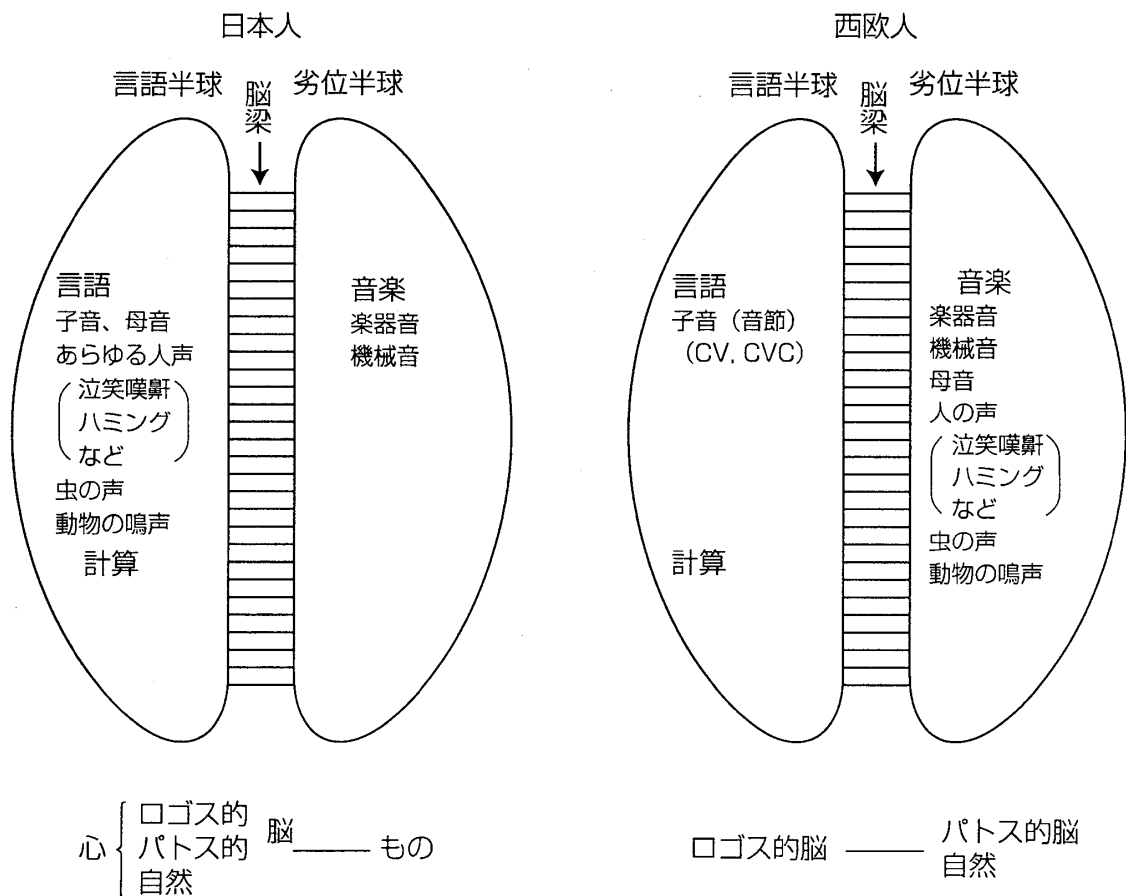
3. 梁塵秘抄 239 峯に起き臥す鹿だにも 仏になること いと易し 己れが上毛を整
へ 筆に結ひ 一乗妙法書いたんなる功德に
4. 同 上 288 法華經八卷は 一部なり 拡げて見たれば あな尊 文字毎に
序品第一より 受学無学作礼而去に至るまで 読む人聞く者皆仏
5. 同 上 21 釈迦の正覺 成ることは この度初めと 思ひしに 五百塵点劫よ
りも 彼方に仏に 成りたまふ
6. 閑吟集 25 ちらであれかし さくら花 ちれかし口と 花ごころ
7. 同 上 252 しゃっとしたこそ 人はよけれ

3・4は、一切の存在が、一心同体であることを、5は、『自然』・『神』（自由・永遠・真理）の時、今であることを、6・7は、いさぎよさと、いじらしさとを、という具合に、私達は、歌意に着目しやすいのであり、且つ、これらは、道歌の類いで、価値が低いとか、世俗仏教の開陳である、単なる好みの問題だ、などと知ったかぶりをしやすいのでありますが、実のことを申せば、これらは、清澄な心そのままの音が、誕生の時を永遠の今においている「小歌」なので、その完全さ（人生上の意義）を各人に経験させる行為が、くりかえしますが、音調の具現化、即ち、歌唱とその聴聞・生活化という行為なのであります。そして、それを保障する切符が、各人の清澄な心であるのは、言うまでもありません。

我が国では、ハラフという行為（ミソギと言葉と、2種ある）が伝統化しておりますが、それは、とりもなおさず、心身の罪穢を洗い、本来の「アカキ・キヨキ・ナホキ・マコトノココロ」（文武天皇・宣命）に帰り着くことなので、このことから、「小歌」が、——『神』のもので、人のものではないこと、「ウタ」は、娯楽ではなく、その本旨は、『神』が、『神』へ、『神』を語ること——にあるのだ、という道筋がわかります。

「ウタ」についてのこの常識が、書かれるうたにも、「花になくうぐひす、みづにすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるもの、いづれかうたをよまざりける。ちからをもちいれずして、あめつちをうごかし、めに見えぬ鬼神をも、あはれとおもはせ、をとこ女のなかをもやはらげ、たけきものゝふのこゝろをも、なぐさむるは哥なり。このうた、あめつちの、ひらけはじまりける時より、いできにけり」、『古今和歌集』・仮名序と書かせ、唄う歌についても、「哥の事、音声ゆたかにして、始終たるまぬやうにうたふこと第一なり。当風といひて、世上に弾うたふをきけば、三味線を君として、哥を臣と覚へしやうに聞え、あしきとかや。哥をもっぱらとし、鳴らし物はまことのあいしらひ、云々、『松の葉』・哥音声并三味線弾方心得」と記させもすることになるのは、実にみやすいところであります。和琴が、器楽としてあるより先きに、『神』の声をうかがうための音の源であったという故事は、ここに至って、アタリマエということになり、ひいては、角田忠信氏の実験になる、日本人特有の音の聴取のあり方（下図。「日本人の脳」。1978・2・15 初版。大修館書店。p.84）の、一層の研究がまたれることにもなると思うのであります。

図5



9. 同 上 64 梅は匂よ桜は花よ 人は心よ振いらぬ

10. 石原和三郎・詞 「はなさかじじい」

一、うらのはたけで ぼちがなく
 しょうじきじいさん ほったれば
 おおばん こばんが ザクザクザクザク
 二、いじわるじいさん ぼちかりて
 うらのはたけを ほったれば
 かわらや、かいがら ガラガラガラガラ。

(三～六番略。現代かなづかい)。

これらは、教訓歌だから程度が低い、などと知識の奴婢になる前に、私達は、自ら歌唱する行為によって、己の心を清澄にし、『自然』音と一体になってみる、そういう本当の経験を経験したいものだ、と、私は思うのであります。『自然』の音を、素直に受納すれば、『自然』存在である、事実（イノチ）としての自己自身が祝われ、そこに、間・髪を入れず、癒しがいやちことなるのは必然で、かくある時、自・他の至福が、駆け出すまいとしても、どうしても駆け出さずにはいないからであります。このことは、一面で、コトワザとも、ウタワザとも言ってさしつかえないのではありますまいか。

本節の終りに、音は意味を超える、「ウタ」の言葉とは、常にそうしたものであります)、とする具体例を1つだけ取りあげてみたいと思います。

ギターによる「小歌」奏法の達人に、木村好夫氏とおっしゃる方がおりました。(惜しむらくは、先年、故人となられました)。

(CDですら)、同氏が「小歌」を演奏されたものを拝聴いたしますと、たちどころに音の美が現前し、これを歌唱の例で申してみますと、ちょうど、「梁塵秘抄」に神唱として紹介のあります「虞公韓娥」・「土師の連」の「ウタ」声にみあうやに感じられる楽音なのであります。それは、瞬時に、人を無何有の宇宙へ放ってしまう、とでも言えば言えるほどの、自由そのものの地上化であって、時や所を、とうに超えた遠い音が、私自身の近くで響き続ける、——そういう体の音楽であると言ってよいかと存じます。かかる自由が、自らの心身を通過する折、いささかの障害物をも作らなかったところに、同氏の無双のイノチが息づいているのを、私は思わぬわけには参りません。

同氏が作らなかった障害物とは、申すまでもなく、音楽知識・その世俗的な証明書に引かれる思い上がり・演奏技術・楽譜・俗受けのする評価・歌詞の分析・演奏料金、等々の一般的には話柄を提供する、一切の不自由さであるのは、何の説明をも要しないところでありましょう。このことあるが故に、同氏は、同氏を、ギターに棄てたので、そのいさぎよさは、

どれほど偉なりとしましても、し過ぎることなどないに相違ありません。

ここから、木村氏がギターを弾いているのか、または、ギターが木村氏を弾かせているものなのか、渾然としてくるのでありまして、つまりは、どこにも木村好夫氏なる人物はいない、というところに、私達は注目しておいてよいと思うのであります。(しかし、木村氏は、目前におられるのです)。

百歩譲って、木村氏がギターを弾いているのだとしても、その演奏音は、通例で言うギター音ではなく、明らかに言葉(日本語)として、私に聞こえてくるのであります。それは、その「小歌」の歌詞でありながら、木村氏の言葉であるとして聞こえてくるのであります。そして、その木村氏の言葉とは、日本の『自然』・日本の『神』々が、木村氏を介して、自らの言葉を発音している、というふうには聞こえてくるのであります。

ここに、感動ということを通じて、創造の原理、及び、そのことにあずかる者の、無限の安らかな孤独・時の停止・平安・自由ということを黙示されているのだと思うのは、ひとり、私だけではないはずであります。

おどんが打死んちゅて 誰が泣やてくりゅきゃ 裏ン松山 蟬が鳴く
おどんが打死ねば 道端埋けろ 通る人ごち花あぐる
花は何の花 つんつん椿 水は天から貰い水

「五木の子守唄」

稗搦節・刈干切唄・江戸子守唄・島原の子守唄・黒田節・田原坂・南部牛追唄・新相馬節・八戸小唄・さらには、船頭小唄・母子船頭唄・男涙の子守唄、これらの、私ども日本の民衆が、一切を我が事とする陰旋律を、木村氏は、どこかでお弾きになっておられるのでしょうか？ 私は、残念ながら、その福音に浴したことがありません。もし、お聞きすることができたなら、それはおそらく、私の死を死なせるはずのものでありましょう。そして、申すまでもなく、日本の民衆の、誰ものそれを。——ここには、近代の西欧が発信した、人為的合理主義などさらになく、すぐれて、「今は昔」の、単純な世の事実(イノチ)が屹立しているだけだからであります。昔と今とは、そこにいかなる間隙も、『自然』の耳目から見えたり聞こえたりした試しがないのです。

そひそはざれ などうらうらとなかるらう ——「閑吟集」

あすをも知らぬ 露の身を せめて言葉をうらやかに ——「隆達唱歌」

「百尺竿頭」までは、誰もが行き着けるものでありましょう。木村氏は、「せめて言葉をうらやかに」し、それを「一步、進」んでみせた勇者であると存じます。私達は、その勇ましさに、己がウチなる『自然』・『神』を「イノル」ことができ、安心して「小歌」を遊べる身に、

いかほど感謝してもさしつかえないのではあるまいか、と思うのであります。

我が国では、木村氏にみられるように、楽器音も『自然』音化する傾向があるために、冒頭より随所に強調しましたような、一種の自然生活が国がらとして伝統となっているかと思われます。これに反し、西欧では、『自然』音も楽器化する傾向があるために、知識や説明が繁茂し、たとえば、説明可能範囲での宗教が、宗教という名で辞書に登場してきているように思われます。私達は、ことごとしく、宗教などと言いたてる必要が、本来まったくなく、目睫の『神』、——『自然』を唄えば、それが不易の生活であることを、縄文以来、シリすぎるほど知っているのです。「歌詠む輩も、萬葉の様など称ひて癖み詠めども、真のよき歌詠みになりぬれば、やすやすとありのままの事とこそ聞こゆれ。何事も、長じぬれば斯くの如し」、(「梁塵秘抄」・逸文)。後白河法皇の寸言は、我が国・民衆歌謡の赤誠を縦断したものであり、ために、私達は、今に嘯風弄月を遊ぶのであると存じます。

おわりに

◎「ウタ」の誉れ(光)、「ウタ」の生活、「ウタ」の教育、「ウタ」の「ウタ」(我が国の宗教について)は、紙数上、割愛しました。

◎本文中、カタカナで表記した下記の日本語は、その音義が文中の意味となっています。

イノチ・アリノママ・サカシラ・ハヤシコトバ・ユリ・タテ・アタリマエ・ウツロフ・アカキ キヨキ ナホキ マコトノココロ・コトワザ・ウタワザ・イノル・シリ(ル)。

注

- 1)『古事記歌謡』。「古代歌謡集」所載。NO.39。頁・60。日本古典文学大系・3。岩波書店。
- 2)「俗語を正すのが俳諧であ」、について。

『黒冊子』。芭蕉門下の俳人・服部土芳の著書による。刊行は、土芳没後46年目の安永5年。蕉風俳諧の真摯な在り方を、微細にわたっても伝えている。土芳には、他に、師の面目を忠実に伝えんとした『白冊子・赤冊子』があり、合わせて、三冊子と呼んでいる。引用は、「芭蕉俳論」・昭和26年、飯野哲二著。学灯社、刊。(意訳)。

平成16年8月15日、攔筆。